



NPO法人 大谷石研究会



大谷石の魅力を全国のみなさんへお伝えする大谷石研究会の広報誌

房州石の産地・千葉県鋸山のふもとと金谷 「第8回石のまちシンポジウム」に参加して

NPO法人 大谷石研究会
副理事長 塩田 潔

去る11月19日(土)、千葉県富津市金谷で開催された「第8回石のまちシンポジウム」に小野口理事長をはじめ、5名で参加しました。当日は、朝からあいにくの雨、ジャンボタクシーにて東

北道、首都高速道、アクアラインを通過して約3時間半、鋸山のふもとと金谷に着。シンポジウムまでは時間があつたので、ロープウェイにて山頂まで行ってみました。

朝からの雨で、おそろしく山頂からの眺めは絶望的かと諦めていたところ、何と私達三行が到着と同時に雨があがり、雲の合間より金谷の街並み、膨大な海が現れ、雲海の中に神秘的な世界が広がりました。正に感動的なひと時でした。昼食は、保田漁港の漁協直営

レストランで「大はかりめ(穴子)天丼」を食し、シンポジウムの会場「金谷コミュニティセンター」へ向かいました。

最初の講演者は大谷石研究会の会員で、宇都宮大学の安森亮雄准教授による「大谷石及び大谷石建築、石蔵集落の調査報告」があり、続いて東京日比谷図書文化館の学芸員、後藤宏樹氏による「明治期の房州石の利用」と題して、常盤橋の石橋築造や江戸城の石垣の裏込めに使用されるなど地味な存在の石であるが江戸期から明治以降の都市基盤造りに寄与してきた石との報告があつた。その後、金谷ストーンコミュニティの西田女史から「鋸山の石切り場(丁場)の測量調査報告」として、石切り場跡の調査(今年で8年

目)を3次元レーザー計測により行った報告があり、測量された3次元の映像がすばらしく、石切り場の実態が鮮明に把握でき、今後のさらなる調査が期待できます。

房州石は、凝灰岩の砂岩であり、金谷石・二元名石・売津石等を総称して呼んでいる。歴史的には、江戸中期から切り出されたよう、江戸末期、明治期に入り本格的に採掘されてきました。主に、江戸(東京)、横浜方面に船で輸送され、湾岸等護岸工事や宅地造成の擁壁等土木工事に主に使用されてきました。横浜の山の手地区の坂道には多くの「房州石」が使用されており、のちに「大谷石」の台頭で衰退していったようである。山の手地区では、今でも「房州石」と「大谷石」の擁壁の競演が見られて面白い光景です。

日本は、「木の文化」と言われていますが、全国を見ても多くの凝灰岩をはじめ、大理石、花崗岩、安山岩等の「石の文化」も各地にみられ、これらが意外と我々の生活文化や産業の発展、振興に寄与してきた事を忘れてはならない。

今回訪れた「房州石」の里、富津市金谷、そして我々の地元「大谷石」の街、宇都宮他全国各地の「石の街」とネットワークを組む、「全国石の街シンポジウム」あるいは、「石の街サミット」なるイベントが全国に広まったらすばらしい事!、そんな妄想を巡らせていきます。



次の日は安森先生と学生、他の参加者が鋸山を見学しました



鋸山



安森先生が大谷石についてを発表



小野口理事長と理事4名でシンポジウムへ